人間関係と自己構造のイメージ

—その2．統計と事例研究—

草田寿子・水島恵一

Structure of Self and Interpersonal Relationship

(2) Statistc and Case Studies

Hisako Kusada and Keiichi Mizushima

This second report refers to an attempt to clarify structure of self and two-persons' relationship (friend, mother-child, etc.), based on the theory and method described before (Report 1). Two methods were used: one is the scale (Table 2 of the Report 1), and the other is the questionair (transformed from Table 1 of the Report 1). Both are concerned mainly on with emotional-attitudinal aspect of relationship as well as feeling of existence; i.e. isolation or independency (individualistic self) v.s. communion (common self). Subjects, 45 university students (17 males and 28 females) were asked to answer as to the usual relationships and good relationships.

As results, it was found that in the good relationships one tends to show the feeling of communion and "common self". Feeling of existence and self-image (individual vs common self) is fairy pararell to the emotional-attitudinal aspects of relationship to each object (isolation vs communion), although some important exceptions were found. Six case studies were made mainly on this point as well as other important phases of image of self and relationship.

1．目　　的

前報の理論仮説に基づき，質問紙法および面接法を用いて，友人関係（対異性恋愛関係を含む），親子関係（主として母子関係）における自己愛・関係像をとらえる．今回はとくに情緒的・態度的次元と存在的次元の双方について，孤立・個的存在性と共同性を明確化することに力点をおいた．なお，統計研究・事例研究併用の人間学的研究法として，本報では，統計処理そのものは簡略化し，全体的蓋然的傾向をとらえること，その結果に基づき，いくつかの典型例，例外例のケース分析を行うことにした．

2．方　　法

①関係性図式スケール（第1論文表2参照．ただし文章は省略し，図式のみを示したもの．ⓐ,ⓖを除いた5×5段階），②関係性総合アンケート（付表1，以下単に「質問紙」と称する．）を用いた．質問紙は水島(1979)の一次元尺度(第1論文表1に近いもの)を上杉(1979)が質問紙化し，それを神田(1980)が2者関係におきかえたものを用い，一部を本研究目的のために変更した．被験者は文教大生45名(男17, 女28)．①同年輩の親しい同性，②同年輩位の親しい異性，③母親を選び，「平均的な普通の関係」(以下「平常時」と称する)と

「最もよい関係」（以下「よい時」と称する）の双方に関して，上記の評定尺度と質問紙を行った．（対異性関係については，その関係が恋愛関係かどうかを記してもらった．）

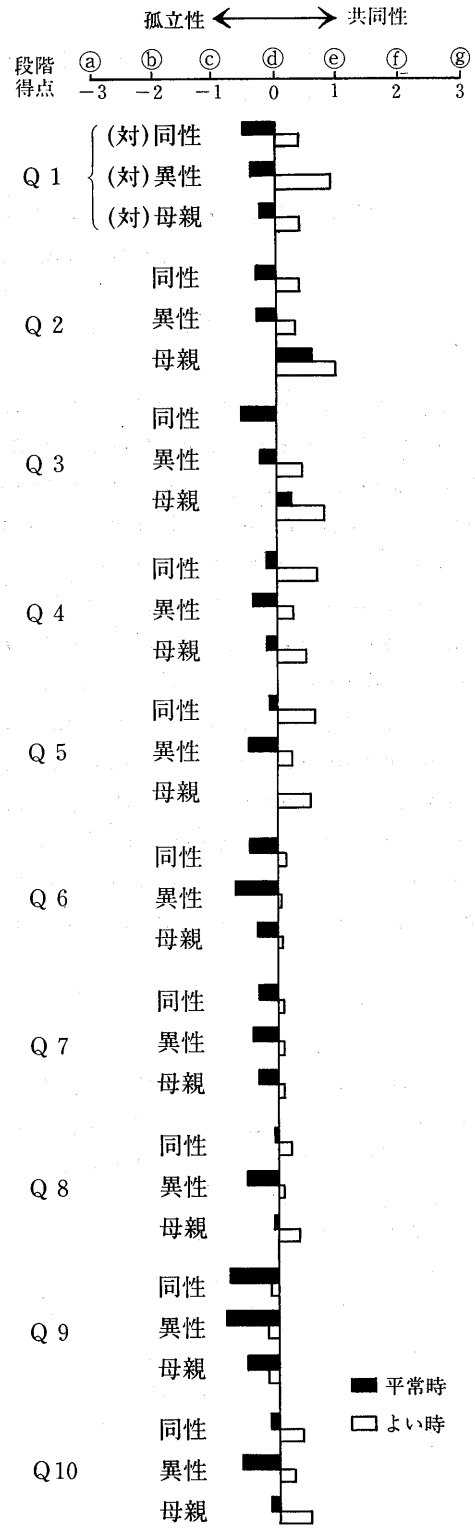
3．統計結果の概要

前述のように統計そのものは，単純集計と必要な相関関係の吟味のみに限定する．なお単純集計に関する限り，男女間に基本的な有意差は認められなかったので，相関関係の吟味のための分類については（とくに問題のあるところ以外は）男女は一括して述べる．

孤立性対共同性の分析の視点として，まず関係性図式スケールにおけるタテ軸とヨコ軸の得点が基本的視点になるわけであるが，タテ軸に関しては，その後の inquiry により，信頼性に多くの疑問が残されたので，統計分析ではヨコ軸だけに焦点をあて，存在感の次元と情緒的・態度的次元を総合した意味で，個的・孤立的な群と共同的な群とを分ける指標にすることを考えた．このため，まずほぼ同じ意味をもつQ10との一致率をみたところ34/45が完全一致を示したので，信頼性においては十分なものとみなした．（以下，関係性図式スケールのヨコ軸を「Q10'」と称する．）

次に，Q10'とQ8（情緒的・態度的次元を典型的に表わしたもの）及びQ9（存在感の次元を典型的に表わしたもの）との相関を求めたところ，Q10'は一応総合の意味をもつとみなせるが，どちらかといえば前者に近いことが示された．したがって，Q10'は情緒的・態度的次元を中心とした総合的な自己像・関係像の分類基準として，統計分析の基礎とした．（事例研究でとくに存在感を問題にするときのみ，Q9による分類を参考にすることとした）．結果3で述べる統計整理において孤立群，中間群，共同群とよぶのは，同性の友人に対する平常時（以下，「対同性平常時」と称する）におけるQ10'の結果によるものである．（孤立群＝b，c段階，中間群＝d段階，共同群＝e，f段階）

図1　単純集計の結果(平均値)



結果１：単純集計の結果は，平均値として図１に示した．ただしＱ７はQ10'のタテ軸を言語化したものなので整理の対象外とする．

１-１：一般的傾向としてｄ段階が多く，個的・孤立的な方向と共同の方向に正規型に近い分布をしている．質問項目によって若干異なるのは（後述する inquiry の結果も含めて考えると），質問項目の文章のニュアンスに大きく依存しているようである．

1-2：対象別（対同性，対異性，対母親）の特徴は，質問項目によって若干異なるが，対母親関係において，最も共同性傾向が高い．（とくに「平常時」では，すべての項目で対母親が最も高くなっている．）対同性と対異性では，（平常時」・「よい時」とも）対同性の方が共同性が高くなっている項目の方が多い．

1-3：対同性，対異性（恋愛関係の場合もそうでない場合も），対母親の場合とも，「よい時」ではQ10'，Ｑ９およびその他の質問項目（Ｑ１～Ｑ８）においても，平均して１～1.5段階共同の方にずれている．すなわち，よい関係の時には，一般に共同性（ないし共同存在）の方に傾くといえる．（ほとんどすべての項目で有意）

1-4：単純集計結果をわかりやすく述べるために，「対同性平常時」において最頻値を示した段階の文章をつなげると，次のような一般的な平均像が浮かび上がる．すなわち「自分と相手はそれぞれ独立して存在しながら，同時に心がつながり合っている(Ｑ６)．自己とは個人的な存在が中心だが共同としての存在感もある(Ｑ９)．具体的にたとえば，相手が何かすばらしい体験をしたときは，かなり関心がある．いろいろ聞いてみたい(Ｑ１)．自分が死んでいなくなっても，相手が生き続けるということを漠然と感じる(Ｑ２)．相手より自分の方が大事である(Ｑ３)が，二人の間ではかなり親密な気持ちで協同行動でき（Ｑ４），自分とは別だが相手の心は相手の心として感じることができる(Ｑ５)．」等々となる．以上を総括して図式で表わすと◎◎である．

結果２：分類に用いた尺度（Q10'，Ｑ９）と，その他の質問項目との相関

Q10'と各項目（Ｑ１～Q10）との相関については，対同性平常時のみについて検討したがすべて正の相関がみられた．ただし，Ｑ４，Ｑ６，Ｑ８，Ｑ９，Q10以外は十分に相関が高いとはいえない．ちなみに存在感を代表するＱ９についても，「対同性平常時」についてＱ１～Ｑ８との相関をみたが，すべて正の相関を示した．ただし，Ｑ６，Ｑ８以外は低く，かつ全般的に上記Q10'との相関よりも低い．

結果３：孤立（個的存在）群と共同群の諸特徴について

ここでいう孤立群，中間群，共同群とは，前述したように「対同性平常時」のQ10'によって分類された３群である．これに対して，各対象，各状況において，ⓐ,ⓑ,ⓒ段階を「孤立性」，ⓔ,ⓕ,ⓖ段階を「共同性」とよぶことにする．以下，表１にしたがって各群の特徴などを述べる．

表１　孤立群・共同群の特徴

人数

各対象，各状況における孤立性，共同性 ＼ 対同性・平常時による3分類			孤立群（a，b，c段階）	中間群（d段階）	共同群（e，f，g段階）	TOTAL
対同性	よい時	孤立性	5（4＋1）	1（0＋1）	0	6（4＋2）
		中立	3（0＋3）	5（1＋4）	2（0＋2）	10（1＋9）
		共同性	3（1＋2）	18（10＋8）	8（2＋6）	29（13＋16）
対異性	平常時	孤立性	7（3＋4）	10（2＋8）	6（2＋4）	23（7＋16）
		中立	3（1＋2）	13（7＋6）	1（0＋1）	17（8＋9）
		共同性	1（1＋0）	1（1＋0）	3（0＋3）	5（2＋3）
	よい時	孤立性	5（2＋3）	4（1＋3）	1（0＋1）	10（3＋7）
		中立	3（1＋2）	7（4＋3）	2（0＋2）	12（5＋7）
		共同性	3（2＋1）	12（5＋7）	8（3＋5）	23（10＋13）
対母親	平常時	孤立性	5（4＋1）	7（3＋4）	0	12（7＋5）
		中立	3（1＋2）	9（4＋5）	4（2＋2）	16（7＋9）
		共同性	3（0＋3）	8（3＋5）	6（0＋6）	17（3＋14）
	よい時	孤立性	4（3＋1）	3（0＋3）	1（0＋1）	8（3＋5）
		中立	4（2＋2）	7（5＋2）	3（2＋1）	14（9＋5）
		共同性	3（0＋3）	14（5＋9）	6（0＋6）	23（5＋18）

（　）内は男＋女

表　2

孤立性 ←→ 共同性（Q10'による）

対象・状況 ＼ 段階		ⓑ	ⓒ	ⓓ	ⓔ	ⓕ
対同性	平常時		ADE	F	BC	
	よい時		AD	F	CE	B
対異性	平常時	A	EF		BCD	
	よい時	A	EF		D	BC
対母親	平常時		AD		BCF	E
	よい時		ADF		C	B E

個的存在性 ←→ 共同存在性（Q9による）

対象・状況 ＼ 段階		ⓐ	ⓑ	ⓒ	ⓓ	ⓔ	ⓕ	ⓖ
対同性	平常時		A	E	BC	DF		
	よい時		A		BCE	F	D	
対異性	平常時		AE		BC	DF		
	よい時		AE			B	CDF	
対母親	平常時		A	BCD	EF			
	よい時		A	B	CDE		F	

A，B，C，D，E，Fは被験者

3-1：対同性の「よい時」では，「平常時」とほぼ同じパターンのまま段階が共同性の方にずれる傾向にある．とくに共同群が「平常時」より共同的になる．なお，Q2において中間群がより共同性を示した点が例外的である．

3-2：対異性でも対同性と基本的には同じパターンが示されたが，とくに「平常時」では，中間群（対同性平常時で分けた場合）が孤立性を示す場合が多い．（対同性，対母親に比して共同性を示すものが著しく少ない．）なお，例外的にQ2では，中間群が共同性の方に傾いている．

3-3：対母親では，「平常時」「よい時」いずれの場合も対同性平常時のパターンがまったくくずれて3群間に差がほとんどみられない．対同性平常時では孤立群でありながら対母親では逆に共同性を示す例がかなりある．なお，「平常時」では，対同性，対異性に比して共同性を示すものが著しく多い．

3-4：異性関係において，それが恋愛関係にある場合はそうでない場合に比して，「よい時」により共同性の（一体感的）傾向を示す．ちなみに非恋愛的異性関係で共同性傾向を示したのは1例（男）のみである．（当然例外分析の対象になるべきであるが，inquiryが試行できなかった．）なお，恋愛感情をもちながらも「平常時」「よい時」の場合とも孤立性傾向を示した例が若干あるが，いずれの例も片思いの状況にあることがinquiryの結果，明らかにされた．愛における孤独感が表われているといえよう．

3-5：とくに男女差が強調される点は，「平常時」における対異性と対母親との関係である．女子の場合は，対異性では著しく孤立性に傾き，対母親では共同性を示す．それに比して男子の場合は，対異性では中間（ⓓ段階），対母親では孤立性を示す例が多い．

4．事例研究

統計整理の結果，特徴的な傾向を示したケースについて，inquiryを行い分析した．その際，①Q10'を中心に全体にわたる自己像・関係像の自由な叙述と明確化，②質問紙の各項目への反応の明確化，③以上を通じて，情緒的・態度的次元（孤立・共同），存在感の次元（個的存在性と共同存在性），実存様式等の具体像を明確化することに留意した．紙数の関係上，本報では6ケースを簡単に記すにとどめる．各ケースの位置づけは，表2のとおりである．Q9による分類は分布上，個的存在群（ⓐ，ⓑ，ⓒ段階）と共同存在群（ⓓ，ⓔ，ⓕ，ⓖ段階）の2分類を用いることとした．

事例A（男子，20才）：本事例の特徴は，統計上一貫して著しく個的・孤立性に傾いている点にある．しかし，質問紙における対母親のQ2，Q3の結果が「平常時」「よい時」ともに共同性傾向を示したのが例外的であった．孤立についての具体的な叙述を記すと，「仲間と妥協してやっていくのは煩わしい．自分にとってどうしてもやりたいことがある時は，仲間からぬけ出し一人でやっていきたい．皆といる時は楽しいが，楽しさだけしか残らない．自分には一人でいる方が合っている．し

かし相手が自分の方に近づいてきた時は別に拒まない．来る人は誰でも受け入れ，去る者は追わない．別に心を閉ざしているわけではない．自分の周囲に集ってくる者は，一人でいると淋しいからといった依存的な人が多い．他人に依存することには嫌悪を感じる．互いに依存しあっている仲間をみると気持ち悪い．一番頼りになるのは自分であり，人よりも自分の方が信じられる．確かなものは自分自身である．一人一人がちゃんと自立し，確固たる自分というものを持つことが大切であり，それができている者同士の結びつきが，本当のつながりだと思う．もし，そういう人が現われたら自分から積極的にかかわっていく．今，大事な事をする際のパートナーが必要なのだがみつからない．パートナーが自分だったら本当にいいと思う．」である．以上，情緒的・態度的な孤立性は一貫しており，説明にも一応，筋が通っている．しかし，他人に依存することに嫌悪を感じる，気持ち悪い(叙述内のアンダーライン)等の表現からして，依存への防衛が働いているのではないかと考えられた．その点，Aは「高校に入ってすぐ，親が死に直面したことがあり，その時から今まで親に甘えていた自分が急に嫌になった．これからは親に依存せずやっていこう．親に心配かけたり，悲しませたりすることだけは絶対にしてはならないと強く思った．今にして思えば，180°の転換だったと思う．むしろ極端だったかもしれない．依存していた方が楽だが，そうすることが人間を弱くすることになり，自分自身を甘やかすことになるので嫌だ．」と述べている．親の病気を契機に，反動形成とともに自我をしっかり確立していくことに価値を見い出そうとする姿勢がうかがえる．

次に，共同性を示した母親に対する質問紙のQ2，Q3の結果についてであるが，まずQ2（自分が死んでいなくなるとしたら）では，「平常時」「よい時」ともにⓖ（相手が生き続ける事実だけで自分には十分である）であった．Q3（自分自身と相手とどちらが大事か）では，「平常時」「よい時」ともにⓔ(かなり同じ位大事)であった．Q2，Q3ともにかなり共同性を示したが，Aの説明によれば，「父親に対しても同じようにつけたと思う．むしろ父親の方がぴったりくる．この質問はとても現実的である．親の存在があってこそ，今の自分が成り立っている．自分が今，こうしていられるのも親のおかげである．両親には恩を感じている．感謝したい．親のためなら自分は犠牲になってもかまわない．もし親が自分の死を望んだら，たぶん死ぬと思う．」と言っている．存在感にもからんでいるようであるが，しかしQ9では孤立性ⓑ段階である．ちなみに，その他の項目においても，対同性，対異性の場合と同様，aかb段階で孤立性の極端を示している．

以上のように，親との愛と呼びうるような関係をもちながら，一つにはそれが依存性や一体感になることへの防衛のため，他方では成熟した独立的態度形成に至っており，それが一般の人間関係の基礎になっている．存在感の観点からいうならば，個的存在感が中核ではあるが，しかし親をはじめとする「恩を受けた人」のためには喜んで自分を犠牲にするような真実性がよみとれる．（A自身もそう内省している．）

事例B（女子，20才）：本事例の特徴は，統計上，全般的に著しく共同性を示しながら，他の質問項目(Q1～Q8)において，対異性の「よい時」以外にはとくに共同性を示したものはなく，分類結果とはずれを示した点にある．ただし，Q9による分類において，対母親だけやや個的存在性を示した．

対同性では，「お互いある程度深い部分でつながっていて，多少傷つけ合ってもどこか一つの根から自分たちが出ているようで，時がたてばまた友達にもどれるという一種の安定感がある」が，それに比して対異性（恋愛関係）では「深い所で心が交錯したにもかかわらず，もしかしたら突然すべてが無になるのではないだろうかという不安な気持が必ずどこかにある」と述べている．また，対同性，

対母親では，「自分の一部という感じ」だが，対異性では，「相手が自分であるという感覚はない．相手が私をつっついて何かを引き出してくれる．ありのままの素直な自分になれる」といった感想を述べている．なお，母親との関係は「母親が自分の中にしみ込んでいる．自分がやらなくても母親がやっているとなんだか自分がやっているような感じ．母親がいないと不安になり自信がなくなってしまう」というようにかなり依存的・共生的な関係を示している．この共生的な関係は，母親のみならず，同性，異性に対しても一般的にみられ，とくに相手に寄りかかっている際，「相手だけが拡大されて，自分がボーと消えてなくなってしまう」というある程度の存在感の異常を伴う表明もみられた．

事例C（女子，20才）：本事例の特徴は，統計上，全般的に共同性を示した点にある．とくに対異性において共同性が著しい．

対同性については「友人関係を築き上げていくには，とくに互いの努力を要する．たとえば何か自分がすばらしいことをし，それを相手が認めることによって，2人の関係が成り立っていく」それに比して異性との関係（恋愛関係）では「自分がすばらしいことをしなくても，むしろ失敗した時にこそ受け入れてもらえ，深くつながっていると感じられる．こういうことは，同性の場合にもあるが，異性の方がより深いつながりを感じる」と述べている．この限りにおいては，前述したBと同じく恋愛共同性を示すものだといえる．しかし，「情熱が強くなると共生的になってしまい，相手を大切にするどころかむしろ相手を縛りつけようとする．結局，自分のことだけしか考えていない．だからよい関係とは感情的なものをある程度おさえ，相手を束縛しない自由な関係だと思う．お互いに成長することによって，つながりも深くなっていく」と述べている．ここには，本研究で当初意図していた図式スケールのタテ軸に関する問題が含まれている．すなわち，恋愛共同存在は，共生的閉鎖性を本来持つものであり，それが成熟するということは，ヨコ軸における孤立性（この場合独立性，個我の尊重）の助けをかりながら成されるものかどうかという点の吟味につながっていくものである．なお，存在感の次元についても，Q9で各対象とも「よい時」には共同存在感を示しているが，「感情的な一体感は瞬間的なもので恒常しない．本当の結びつきとはそんなものではない．人間はそういう深いものでつながっていると思う．だからこそ安心して一人で自由に動ける」など，むしろ成熟（図式スケールのタテ軸）と関連したニュアンスが強調されている．前述のケースBの共生的ニュアンスと対照的であるが，inquiryにあたっての理想と現実，ホンネとタテマエとの関係など，極めてデリケートに深めていかなければならないケースと思われる．

事例D（男子，20才）：本事例の特徴は，対同性，対母親ともに孤立的であるのに対して，対異性では著しく共同性を示している点である．この異性と母親との関係について分析を試みたが，母親のことに関しては話したがらなかった．異性関係（恋愛関係）については，「お互いに依存し合える」「いつも自分のそばにいてみつめていてほしい．一緒にいないと不安」「彼女が自分に甘えたり頼っている場合は，彼女が自分の中に存在しているが，その逆の場合は，自分がすっぽり包み込まれる感じ」と述べている．質問紙の結果をみても，「彼女のよろこびの中に一体となる」(Q1)，「相手の中に生き続けることが実感できる」(Q2)，「相手は自分と同じ位大事」（Q3)，「自分と相手は一体である」(Q6)，「相手中心の関係のみが感じられる」(Q8)，「自分も相手もない合一した共同存在が自己である」(Q9）等々，情緒的・態度的な面でも，存在感の面でも著しい共同性が示されていた．

事例E（女子，20才）：本事例の特徴は，対異性では孤立性を示したのに，対母親（この場合はとくに父親）では共同性を示した点にある．これは前述の事例Dと極めて対照的な結果である．inquiryの結果，異性にはあま

り興味がないこと．その背後には生活史上の特殊な条件があることなど，上記の結果を裏づけるような事実が明らかになったが，本人の希望のため具体的に記すことはさしひかえたい．

事例F（女子，20才）：本事例の特徴は①Q10'による分類の結果，対母親において「平常時」では共同性を示しながら，「よい時」では孤立性に傾いている（これは前述した統計結果の一般的傾向とは逆である）．しかし，質問紙では，双方の場合とも共同性傾向が著しい，②Q9による分類の結果は，各対象に対して，「平常時」も「よい時」も一貫して共同存在的な傾向（主としてⓔ，ⓕ段階）を示している，という2点である．

対母親では，「精神的な支えであり，一番依存できる．母のそばにいれば安全だが，少し窮屈になってきた．今のままでは自分のやりたいことができない．だんだん自分が小さくなり，自分自身を生きているという実感がなくなってくる．母から離れたいと思うが，なかなかできない」と述べている．母親に依存的で，一体感をもっていることがわかり，その状態が質問紙に（共同性として）表われているが，それは必ずしもよいものとは認知されていない．（客観的にも未成熟な面が認められている．）だが，「よい時」に示した孤立性については，「理想的関係について答えてしまったのかもしれない」など，F自身もうまく説明ができなかった．やはり図式スケールのタテ軸を考慮に入れなければならないケースのようであった．②の存在感に関する全体的共同存在傾向についても，Fは十分な説明をしえていないが，とくに対母親関係で，「自分が小さくなる」「自分自身を生きている実感がない」など，個的存在感の不確かさを表明しており，独立しようとしていながら，それが達成できないことが暗示されている．

以上，同性の友人関係，異性関係（恋愛関係を含む），母子関係における自己像・関係像を統計・事例の両面からおおざっぱにみてきた．いずれの関係においても一般に情緒的・態度的次元，存在感の次元とも「平常時」に比して「よい時」の方がより共同性傾向を示した．また，母子関係において共同性傾向が最も顕著であった．本研究では，とくにこの共同性傾向の情緒的・態度的次元と存在感の次元とを明確化することに視点をあてた．

事例研究において，一貫して共同性傾向を示した2例を中心に，6ケースを全体的に検討していえることは，第1に共同存在的な関係を示した者には，多かれ少なかれ依存的・共生的ニュアンスが多分に含まれていることである．この傾向が一般的なものかどうかは今後の課題であるが，現象としての共同存在性は，価値的に高く評価されている場合でも未成熟な依存性を含んで成立しているようである．だが，この未成熟な依存性を示した本事例の中にも，相手を大事にする，相手のために協力するなど，個の尊重，共同性の内面的な充実を高めるニュアンスが示唆されている．その充実（図式スケールのタテ軸にあたる）を暗示する一つの例として事例Cが考えられたわけである．すなわち，同じ共同性でも多少の依存性は含みながらも，ある程度独立しながらなおかつ深く交わっているといった成熟した自由な関係である．一方，個的・孤立的傾向を示した事例Aにしても，依存に対する反動形成を含みながらも，個を確立し成長しようとする姿勢がうかがえ，そうした上での真の成熟した共同性が育つ可能性がうかがえる．つまり，個的・孤立性をもちながらもそれらが成熟したあかつきには，共同性が成熟したものと同じものに帰するのかもしれない．

以上，図式スケールでいうならば，孤立(個)の極であれ，共同の極であれ，成熟を表わすタテ軸において同じニュアンスが生じてくることが十分考えられる．それは第1論文の理論仮説の中にも暗示されている．タテ軸の内的充実（個の内面）とつながり（深層の交わり）を不可分に設定し，ヨコ軸の個的存在性に対する意味での共同性（枠的交わり）と区別した一つの所以である．

本研究ではタテ軸の被験者自身による評定が，信頼性に関して疑問が残されたので統計整理からは，やもうえず省いてしまったが，このタテ軸の重要性をあらためて認識することができる．タテ軸とヨコ軸の2次元的視点を深めれば，個的・孤立性，共同性の質的なニュアンスがさらに明らかなものになるであろう．第1論文に述べたように，2次元スケールはまだ質問紙化が行われていず，かなりの程度研究者の客観評定に依存している段階である．このような意味で，被験者自身のスケール評定とは別に，研究者が inquiryを行い．6ケースについて図式スケールのタテ軸を評定した結果，比較的⊕段階がA，C，D，⊖段階がB，E，⊥段階がFであり，成熟としての共同性に関するニュアンスに示唆を与える．ただ同じくタテ軸を表わすQ7の結果が必ずしも上記と整合的でないので，今後の問題を多く残している．

存在感の次元は，①情緒的次元と一般的には密接な関係にあるが，かなりずれる場合もある．たとえばケースAにもみられるが，一般に母親に対して共同的な関係（とくにQ2，Q3）は必ずしも存在感の次元とくにQ9の共同存在性には結びつかない．いわんや，昔の家族共同体におけるような存在感ではない．以上のようなずれに対して，一方ケースB，Fのような，情緒的・態度的共同性において，共生的自己喪失感につながるような表現がみられている点は，まさに情緒的次元と存在感の次元とが対応したものである．

BやFのような一体感においては，成熟した自己超越はみられていない．Tグループや年配者における成長体験の従来の研究とは異なっている．むしろ，この年令（20才代）においては，ケースA，Cが示すように，個的存在感や独立性あってこそ，つまり個としての自分自身を確立してこそ，はじめて真の意味での人とのふれあい，交わりがもてるのかもしれない．個的存在感や独立に伴う孤独感をかみしめてこそ，成熟した共同性に伴う真の愛ともでもいうべきものを知るのかもしれない．ここでも成熟の次元にあわせて，今後（第1論文表4を吟味するような形で）検討する必要があろう．

文　献

1．水島恵一　1987　人間学，有斐閣
2．水島恵一　1979「体験と意識」研究の方法論，体験と意識に関する総合研究第1集
3．上杉　喬　1979　対人認知構造の変容過程の測定，日本心理学会第43回発表論文集
4．神田久男　1980　場面状況における対人認知構造の変容過程，体験と意識に関する総合研究第2集

付表1　関係性総合アンケート項目

Q1.　相手が，何か，すばらしい体験をしました．
a．全く関心がない．自分とは無関係だ．
b．関心はあるが，自分とは関係ない．
c．かなり関心がある．いろいろ聞いてみたい．
d．自分にとっての体験ではないが，それなりに，うれしい．
e．あたかも自分のことのように，うれしい．
f．彼のよろこびの中に，一体となる．
g．彼のよろこびそれ自体で十分である．(没我)

Q2.　2人のペアーの間で，自分が死んでいなくなるとしたら．
a．暗黒，絶望．すべては無意味．
b．相手は生き続けるのだが，自分には，無意味．
c．相手が生き続けるということを漠然と感じる．
d．相手が生き続けるということを，はっきりと感じる．
e．生き続ける相手に自分を託すことができる．
f．相手の中に生き続けることが，実感できる．
g．相手が生き続ける事実だけで，自分には十分である．(没自)

Q3.　あなたにとって自分自身と相手とどちらが大事と問われたら．
a．自分のみ　　b．自分≫相手　　c．自分＞相手
d．自分≦相手（時に同じ位大事になる）＞　　e．自分＝相手（かなり同じ位）
f．自分＝相手（合同）　　g．相手＞自分，または 相手のみ

Q4.　あなたがたペアーの間で，あなたは．
a．協同行動はとてもできない（意志もない）．
b．義務としての協同行動はできる．
c．役割として，いくらか親密に協同行動できる．
d．かなり親密な気持で協同行動できる．
c．親密に協同行動でき，ときには一心同体になれる．
f．一心同体で協同行動ができる．
g．ただ，相手のために行動する．（自分を無にして）

Q5.　あなたにとって，今，ぴったりと感じられるものは？
a．人の心など，わかるものではない．
b．ことばで，また，頭でわかるだけで，その限りである．
c．相手を一応理解でき，ときには，心を感じる．
d．自分とは別だが，相手の心は，相手の心として感じることができる．
e．相手の心が，それとして感じられ，ときには自分の心とも一緒になる．
f．相手の心と自分の心が，ぴったり一緒になって感じられる．
g．ただ，相手の心だけが感じられる．（自分を意識することなく）

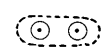
Q6.　このペアーの間で，自分と相手は．
a．無関係な存在である．
b．それぞれ独立して存在し，その間に，役割上の交渉があるだけである．
c．それぞれ独立して存在しながら，その間に，いくらか心の通い合いがある．
d．それぞれ独立して存在しながら，同時に，心がつながり合っている．
e．親密に心がつながり合い，相手とのまとまりが感じられる．
f．自分と相手は一体である．
g．ただ，相手の中に生きている．

Q7.　あなたにとって相手の実感は．
a．相手のことは眼中にない，見えない．
b．相手は対象にすぎず，主体として認知されない．
c．相手は主として対象にすぎないが，いくらかは主体として感じられる．
d．相手は対象としても感じられ，主体としても感じられる．
e．相手の主体としての実感が強い．
f．相手は，全き主体として，はっきり実感される．
g．相手自身のみが，全き主体としてはっきり実感される．

Q8.　相手とのつながりの実感について
a．つながりなど全くない．
b．つながりの実感がない．
c．つながりが，いくらか感じられる．
d．つながりが，かなり感じられる．
e．つながりが強く，ある程度一体に感じられる．
f．一体に感じられる．
g．相手中心の関係のみが感じられる．

Q9.　存在感と「自己」の実感
a．「自己」とは，個人的存在だが，実感がない．
b．「自己」として実感できるのは，個人的存在だけである．
c．「自己」とは，個人的な存在だが，共同的なものもどこかで感じる．
d．個人的な存在が中心だが，共同としての存在感もある．
e．自他を含んだ共同の系が自己である．（個人的な存在はあまり重要でない）
f．自分も相手もない．合一した共同存在が「自己」である．
g．相手の方がより「自己」である．

Q10．相手との関係をあらわす次のような図式の中で一番ぴったりするものは．

a．⊙（自分のみ）　b．⊙ ⊙　c．  　d．

e． 　f． 　g．⊙（相手のみ）